抵当ノ登記ハ其効力ヲ有スルコト三十年ヲ経ル
限リモノニシテ此期間ヲ経過シタルトキハ登記
ハ其効力ヲ失フモノナリ三十ケ年ノ期間ハ一
方ニ於テ登記ノ効力ノ期限タルト同時ニ他ノ
一方ニ於テハ抵当ノ附従スル債権ノ時効ニ対
シテハ最長ノ期間ナリトス
右ニ掲クル如ク抵当ノ登記ノ消滅ト債権ノ時
効トノ関係ニ至ツテハ多少ノ注意ヲ為スヲ
要ス宜敷ニ於テ生ジ得ベキ数個ノ場合ヲ挙
ケテ之ヲ説明スベシ

第一債権ノ時効ガ三十ヶ年ニシテ且ツ其時効ガ停止セラルヽコトナク又中断セラルヽコトナキトキハ三十ヶ年ノ期間ヲ以テ債権ハ消滅シタルモノト推定セラレ其担保タル抵当権モ亦右ノ結果トシテ効力ノ消滅ノ推定ヲ受クベシ（参考第二百九十二条第三号）此場合ニ於テハ抵当ノ登記ガ同時ニ消滅シタルコトト特ニ注意ヲ為スノ必要ナシ

第二債権ノ時効ガ三十ヶ年ヨリ短キ期間ヲ以テ成就シ債権ト其担保タル抵当トガ同時ニ消

滅シタルトキハ抵当ノ登記ハ効力ヲ有セサル
コト明カナリ然レトモ此場合ニ於テハ右ニ述
ヘタル三十ケ年ノ期間ニ由テ登記ノ効力ヲ失
ヒタルモノニハ非ラサルナリ
第三債権ノ時効ガ三十ケ年ニシテ成就スヘキ
場合ニ於テ其時効ガ停止若クハ中断セラレタ
ルトキハ債権ハ三十ケ年ノ経過ニ由テ消滅ス
ルコトアルヘシト雖トモ仍ホ抵当ノ登記ハ
此期間ニ由テ効力ヲ失フヘシ何トナレハ此消
滅ハ総テ権利者ガ無能力者ナルトキト異トス

停止セラルヽモノニ非ラス（参考第二項）又登記ノ更新ヲ怠ルニ非ラサレハ此失権ヲ中断スルコト能ハザレハナリ而シテ此ニ假定スル場合ニ於テハ三十ケ年ヲ経過スルノ間此更新ヲ怠サリシ場合ナリトス

第四債権ノ時効ニ必要ナル期間ハ三十ケ年ニシテ且ツ其時効ハ停止若クハ中断セラレザルトキ三十ケ年ノ期間満了ニ先チテ抵当ノ登記ヲ更新スルモ債権ト其担保タル抵当権トハ均シク三十ケ年ノ満了ニ中テ消滅スヘシ何トナ

トハ抵当ノ登記若クハ其更新ハ時効ヲ中断スル
ルモノニ非ラサレハナリ（巻末第三号九十八条）
第五債権ノ時効ニ必要ナル如期ガ三十ケ年ヲ
以テ十ケ年ニテ且ツ其時効ガ中断セラレタルト
キハ債権ハ仍未滅スルコトナク抵当ノ登記
ハ依然トシテ効力ヲ有スベシ何トナレハ抵当
ノ登記ノ効力ヲ失フハ三十ケ年ノ後ニシテ
此期間ハ未タ満了セサレハナリ
本条ノ末文ニ於テ立法者ハ登記ノ効力ヲ失ヒ
タル後若クハ其前ニ於ケル更新ノ効力如何ヲ

規定セリ若シ登記ノ後三十年ノ期間内ニ於テ其更新ヲ為シタルトキハ抵当人ハ初ノ順位ヲ保存スルモノナリ之レニ反シテ第一ノ登記ガ効力ヲ失ヒタル後ニ至リ更新ヲ為シタルトキハ其更新ノ日附ニ於テ新タニ登記ヲ為シタルト同一ニシテ其抵当ハ更新ノ日附ニ於テ順位ヲ有スルニ止マル

第二百六十四条ノ下ニ於テ設明シタル如ク債務者ガ無資力ノ宣言ヲ受ケ若クハ無資力タル

者が無資力ノ宣言ヲ受ケ若クハ無資力タルコ

ト証明セラレタル至リシトキハ債権者ハ最早抵当

ノ登記ヲ為スコトヲ得サルモノトス

若シ債権者ノ抵当ノ登記ヲ為シタル後債務者

無資力トナリタルトキハ之ガ為メニ三ヶ年

ノ期間内ニ於ケル登記ハ更新ノ権利ヲ失フ

モノニ非ラズ何トナレバ更新シタル登記ハ第

一ノ登記ト同一ノ日附ヲ有スルモノナレバナ

リ

然レトモ第一ノ登記ノ後三十ヶ年ヲ経過シ其

登記ガ効力ヲ失ヒタルトキハ最早更新ヲ為ス

コトヲ得ズ何トナレバ此場合ニ於テハ新タニ登記ヲ為スト同一ニシテ是レ法律上為シ得ザルカラサル所ノコトナレバナリ

第二百二十三条

登記ニ至ラザル一切ノ訴訟ハ財産所在地ノ裁判所ノ管轄ニ属スベキモノトス但特別ノ法令ニ此訴訟ハ宅地ノ物上ノ性質ヲ有スルモノナリ

第二款　登記ノ抹消減少及ビ正誤

第二百二十四条

本条ノ明文ハ登記ノ抹消ニ至ラザル二個ノ原因

本条ノ明文ハ登記ノ抹消ニ至ル二個ノ原因ヲ指示セリ而シテ二個ノ原因ハ共ニ債権者ノハ抵当権ニ発スルモノニシテ登記ノ抹消ハ実ニ自然ノ結果タルニ過ギサルナリ所本条ノ法文ハ甚ダ明瞭ナルガ故ニ特ニ詳細ノ説明ヲ要スルノ所ナシ

唯債務ノ消滅ニ関シテ一ノ注意ヲ為スベシ即チ債務ノ消滅ガ単ニ一部分ニ止マルトキハ後ニ掲クルガ如ク登記ノ減少ヲ為スヲ可キモノニシテ本条ニ規定スル如ク登記ノ抹消ヲ為ス

ハ軍ニ債務ノ全部ガ消滅シタル場合ニ限ルモノトス

本条第項ノ明文ニ徴フトキハ右ニ掲ゲタル所ノ外仍本第二百三十一条ノ場合ニ於テ登記ノ抹消ヲ為スコトヲ知ルヲ可シ法文ニハ第二百三十条ト記載セリ然レトモ是レ第二百三十一条ノ誤リナルコト而条ノ法文ヲ一読スルトキハ容易ニ之ヲ知ルヲトヲ得ベシ

第二百二十五条

登記ノ抹消ヲ為シタルトキハ利害関係ヲ有スル

ルカ三者ハ之レニ由テ其登記ノ効力ヲ生ノ消滅シタルコトヲ信ジ居ルカ故ニ登記ノ抹消ハ軽々シクノ之ヲ為シ得ベキモノニ非ラズ此故ニ登記ノ抹消ハ必ズ裁判上ノ請求ヲ為シ判決ニ基キテ之ヲ為スコトヲ要ス然レトモ若シ此点ニ付キ第二百三十三条以下ニ規定スルガ如ク当事者ノ協議ニ出シタルトキハ格別ナルコト言ヲ俟タズ

登記ノ抹消ニ関スル請求ニ付キ裁判所ガ判決スベキ問題ハ甚ダ重大ノモノタルベシ何トナ

登記ノ抹消ヲ為シタルトキハ利害関係ヲ有ス

シ、其問題ハ第一抵当ニ由テ担保セラルヽ債
権ノ成立効力又ハ法律ノ認メタル方法ノ一ニ
基ク債権ノ消滅等ニ関スルコトヲ有シ可キ第二
法律上合意上若クハ遺言上ノ抵当ノ成立ニ関
スルコトヲ有シ可キ又第三ニ抵当ノ登記ノ効力
ニ関スルコトヲ有シ可キヲ以テナリ
此訴訟ノ管轄裁判所ハ第二百二十三条ノ規定
ニ従ヒ不動産所在地ノ裁判所ナルコトヲ勿論ナ
リ然レトモ当事者ノ能力ニ関スル問題及ビ他
ノ問題ニシテ間接ニ登記ノ問題ニ関係スル及ボ

ス可キ問題ヲ判定スルコトヲ要スルトキハ被告人ノ債務者ノ住所ノ地ノ裁判所ハ普通法ニ從ツテ管轄ヲ有スル可シ若シ此ニ付キ不動產所在地ノ裁判所ニ訴訟ヲ提起シタルトキハ被告ハ管轄違ノ抗弁ヲ為スヲ以テ足レリトス

第二百二十六条

左条以下ノ明文ハ登記ノ減少ニ関スル事項ヲ規定シ順次ニ三種ノ抵当権ニ至シ明文ヲ設ケタリ

婦ニ屋ニル抵当ノ登記ハ二個ノ原因ニ由テ減

少セラルヽコトヲ得ベシ第一婦ノ有スル債権
ガ登記セラレタル抵当ノ目的物タル不動産ノ
優劣ニ比シテ甚ダ小ナルトキ第二実際ニ於テ
婦ノ有スル債権ノ優劣ヨリ大ナル金額ニ對シ
抵当ノ登記ヲ為シタルトキ是レナリ
右ニ掲ケタル二個ノ場合ノ外仍ホ第三ノ減少
ノ場合アルヿ可シ然レトモ此場合ハ独リ婦ノ抵
当ニ特別ナルモノニ非ラズシテ一般ノ抵当ニ
普通ナルガ故ニ最後ノ法文ニ於テ之ヲ規定セ
リ即チ抵当ノ担保ヲ有スル債権ガ其一部ニ於

テ減少シタル場合是レナリ（参看第二百三十一

テ消滅シタル場合ニハ第二百三十一条

右ニ掲ケタル種々ノ原因ニ因リ登記ノ抹消ヲ為スニハ第一ノ場合ニ在リテハ抵当ノ目的ト為リタル一個若シクハ数個ノ不動産ニ制限セラレタルコトヲ必要トシ第二ノ場合ニ於テハ債権ノ評價ガ金壹ニ由テ為サレタルモノニ出ツルコトヲ必要ト為ス

第二百二十七条

未成年者及ビ禁治産者ノ為ニスル法律上ノ抵当

抵ハ存続ノ場合ニ於テ全ク婦ニ帰スル抵当権
ト同一ノ秩序ヲ与ヘタリ即チ前条ニ規定シタル所
ト均シク二個ノ原因ニ由テ登記ノ減少ヲ来タ
ルコトアルヲ可シ且ツ此減少ハ前条ニ掲ゲタル
区別ニ従ヒ同一ノ制限ヲ受クベシ即チ其抵当
ガ親族会又ハ非任見人ト任見人トノ協議ニ依
リ合意上ノ価値ヲ得タルコトナキヲ要ト
第二百二十八条及ヒ第二百二十九条
合意上ノ抵当権ハ特別ノモノナルガ故ニ其目
的タル不動産物ニ定ニテハ価値上減少シ得ベ

ヤラサルモノヽ如シ然レトモ既ニ第二ニ述ヘタル
ノ場合ニ於テ説明シタル如ク民法ハ債務者ノ
現在ノ不動産ニ付キ特別ノ指定ヲ為スコトナ
クシテ全部若クハ一方ヲ登記ニ付スルコトヲ
許セリ此場合ニ於テ若シ債権ノ額ニ比シ担保
ノ價額甚タ大ナルトキハ登記ノ減少ヲ為スコ
トヲ得ヘシ債権ノ評價ノ過重ヲ理由トスル登
記減少ノ第二ノ原因モ亦其評價ガ債務者トノ
合意ヲ以テ為サレサル場合ニ於テハ之ヲ合意
上ノ抵当ニ適用スルコトヲ得ヘシ

遺言上ノ抵当ニ至シテモ亦同一ノ決定ト同一
ノ条件トヲ適用スヘキ可シ
第二百三十条ノ書ヲ説明シタル如ク抵当権ハ不可分ノモノナ
レハ故ニ其担保ハ債務ノ一分ガ消滅スルモ之
シガ為メニ抵当ノ登記ハ何等ノ減少ヲモ為シ
得ヘキモノニ非ラサルガ如シ然レトモ是レニ
個ノ相異ナル事項ヲ混同スルモノニシテ特ニ
注意ヲ為スコトヲ要スル蓋シ登記ノ減少ハ決シ
テ債権者ノ担保ヲ減少セシムルモノニ非ラス

何トナレバ此場合ニ於テハ法文ニ於テ明記ス
ル如ク抵当ノ目的タル不動産ヲ減少スルニ非
ラスシテ唯登記中ニ記載セル債権ノ額ヲ減少
スルニ過ギザレバナリ然ラバ即チ此抵当ノ減
少ハ従来債務者ガ不当ノ登記ニ由テ蒙ムリタ
ル信用上ノ損害ヲ償フ正当ノ地位ニ復スル
ニトヲ得ル一個ノ方法タルニ過ギサルナリ」
然レトモ之法者ハ債務ノ一部ノ弁済ヲ告ケト
キハ如何ナル場合ニ於テモ抵当ノ登記ヲ減少
シ得ベキモノトスルニ非ラズ即チ債務者ガ少

リモ其半額以上ニ於テ消滅シタルコトヲ要
小又ハ債権者ノ減少ヲ許スハ此ノ如キ制限アリ
ト雖トモ其他ノ場合ニ在ツテ債務者ハ弁済シ
タル金額ノ多少ニ拘ハラズ債権者ノ証記ノ欄外
ニ之ヲ記入セシムル権利ヲ有スルモ唯其目的
トスル所ハ自己ノ信用ヲシテ其現実ノ形状ニ
従セシムルヲ目的トスルモノナルガ故ニ之レ
ニ要スル一切ノ費用ハ債務者自カラ負担スベ
キモノト勿論ナリトス

第二百三十一条

債務者ノ請求ニ因リ登記官吏ノ許ニ付キ裁判所ガ判決ヲ為ストキハ必ズ如何ナル不動産ニ付テ抵当ヲ受除シ又若干ノ金円ニ付キ登記ノ効力ヲ存スル可キヤヲ明示スルコトヲ要ス第一ノ場合ニ於テハ抵当ノ抹消ヲ為スコト有ル可シ而シテ此抹消ノ場合ハ第二百二十四条ニ列記シタル二個ノ場合ノ外ニシテ同条ノ末項ニ依リ本条ノ規定ニ依リタル場合ナリトス此故ニ第二百二十四条ニ掲ケタル抹消ハ軍ニ債務者ノ一切ノ不動産ヲシテ負担ヲ受ケレシムル

場合ノミニ実ニ入モノタルヲ知ル可シ

第二ノ場合ニ於テハ債務者ノ一個若クハ数個ノ不動産ハ仍出抵当ヲ直担スル可シト雖モ其担保ニ入債権ノ金額ハ従来ニ比シテ減少スル可シ

第二百三十二条

意外ノ事又ハ不可抗力ニ依リ担保ノ減少ヲ来タシタル場合ニモ法律ハ債務者ヲシテ抵当ノ補足ヲ為スノ義務ヲ有セシムルコトナシ（参看第二百〇一条）

第二百三十三条

抵当

ヲ制限シタル場合ニ於テ其不動産ガ保証ヲ減
ジタルトキハ総合其原因ガ高外ノ事若クハ不
可抗力ナルトキト雖トモ是レガ為メニ債務者
ヲシテ抵当ノ補足ヲ供スルノ義務ヲ免カレシ
ム可キニ非ラズ何トナレバ此場合ニ於ケル担
保ノ減少ハ直接ノ原因トスル所不可抗力ナリ
ト雖ドモ仍ホ間接ノ原因ヲ考フルトキハ債務
者ノ所為其ナッテ力アリトス何トナレバ担保
ノ減少ハ抵当ノ減少ニ依ルモノニシテ従ッテ
之ヲ請求シタル債務者ハ此減少ノトキニ於テ

第二百〇一条ト雖トモ若シ動産ニ抵当

将来ノ担保ヲ間接ニ不充分ナラシメタルモノ
ト認ハサルヲ得ズ

第二百三十三条

登記ノ減少ヲ為スヲ可キトキハ債権者之ヲ承諾
シ而シテ債務者ヲシテ特ニ裁判所ニ請求スル
ヲ要セシメサルモ尤モ希望スヲ可キ所ナリ何ト
ナレバ訴訟ハ時日ヲ費ヤスノミナラズ仍ホ動
カラサル費用ヲ要スレバナリ然リト雖トモ他
ノ点ヨリ観察スルトキハ登記ノ減少ハ甚タ重
大ノ所為ニシテ債権者ノ地位ニ変更ヲ来タス

ニト甚タ著シキモノナルヲ以テ此場合ニ於テ
ハ債権者ノ承諾ハ特ニ書面ヲ以テ之ヲ要フル
ニトヲ必要トセリ若シ登記ノ減少ニ実ニル判
決アリタルトキハ其判決ガ確定シタル後ニ非
ラザレバ其減少ヲ為スヲ可カラザルコトヲ論ナ
リ登記ノ抹消ニ実シテモ亦之レト異ナルコト
ナシ

第二百三十四条

本条ニ於テ立法者ガ登記ノ減少若クハ抹消ヲ
承諾スルニ付キ債権者ノ有スル能力ニ実シ

生メタル区別ハ至当ノモノニシテ容易ニ之シガ設明ヲ為スコトヲ得ベシ若シ債務ノ全部若クハ一部ノ消滅ノ場合ナルトキハ債権者ハ債務ノ弁済ヲ受領シ若クハ已ニ為サレタル弁済ヲ追認スルノ能力アルヲ以テ充分ナリトス何トナレバ此場合ニ於ケル抵消又ハ減少ノ承諾ハ全ク弁済ノ追認ヲ以テ基礎トスルモノナレバナリ之レニ反シテ他ノ事由ニ基キ抵消又ハ減少ヲ生ズル場合ナルトキハ常ニ爭議ノ性質ヲ有スルモノナルガ故ニ債権者ハ必ズ和解ヲ能ク

ニノ能力ヲ有スルコトヲ要ス何トナレバ此場合ニ於テ減少若クハ拒絶ノ承諾ヲ為スハ自カラ有スル権利ト債務者ノ義務トニ付キ均シク裁判ヲ為スモノナレバナリ又登記ノ利益ノ全部若クハ一部ニ付キ単純ニ抛棄ヲ為ス場合ニ於テハ債権者ハ自己ノ債権ニ付キ無償ニテ害分ヲ為スモノタルコト明カナリ此故ニ必スヤ贈與ヲ為スノ能力アルコトヲ要ス

第二百三十五条

抵当権ヲ承諾スルノ委任ハ必ス証書ヲ以テ之

ヲ為スコトヲ必要トスル心ガ故ニ之ヲ減少ニル
コトヲ目的トスル委任モ亦同一ナル方式上ノ
条件ヲ備フルコトヲ要ス
代理人ノ能力ニ関シテハ抹消又ハ減少ノ原因
タル行為ニ関スル機限ト同一ナリトス
第二百三十二条
登記ノ抹消ヲ為スニ当ツテハ決シテ任意ノ登
記ヲ塗抹スル可キニ非ラズ蓋シ一旦為シタル登
記ガ抹消セラルヽトハ之ク其登記ノ抹消モ亦
時トシテハ取消サルヽコト有ル可シ従ツテ当

動ノ登記ガ再ヒ効力ヲ生ズヘキ場合アル可ケ

訴ノ登記ガ再ビ訴カヲ生ズベキ場合アル可ケレバナリ（巻番次条）此故ニ登記ノ抹消ヲ先ズニ言ツテヤ其欄外ニ於テ登記ヲ許可シ若クハ金山々人合言若クハ判決ヲ附記スルコトヲ要ス此ノ如クナルトキハ之レニ由テ抹消ノ原因ヲ知ルベキヲ得ベキノミナラズ仍キ其正当ナル理由ヲ明カナラシムルニトヲ得ベシ

登記ノ減少ニ至ツテハ唯登記ノ欄外ニ之ヲ附記スル可キモノタルコト勿ヨリ明カナリ何トナレバ其目的トスル所登記ヲ変カシタルハ不動産ヲ指

時トシテハ取消サルルコト有ル可ノ径ツテ書

示し若クハ制限セラレタル債権ノ額ヲ指示スルニ在レバナリ

第二百三十七条

一旦登記ノ抹消若クハ減少ヲ宣スル判決確定シタルトキハ其判決ガ再ビ取消サルヽ如キコトハ実際ニ於テ甚ダ罕レナルモ可シ何トナレバ已ニ述ベタル如ク裁判確定ノ後ニ非ラサレバ此抹消若クハ減少ヲ登記簿ニ記入スルコト有ラサレバナリ然レトモ再審ノ訴ノ如キ非常上訴ノ場合アルコトヲ得ベシ而シテ此上訴ヲ為

訴ノ場合アルコトヲ得ベシ而シテ此上訴ヲ為

モ前ニ説明シタル抹消若クハ減少ノ訴ヲハ之ヲ停止スヘキニ非ラサルナリ此故ニ本条ノ規定ハ此ノ如キ特別ナル場合ニ於テ其適用ヲ看ルベシ又合意ヲ以テ登記ノ抹消若クハ減少ヲ許シタル場合ニ於テハ容易ニ本条ノ適用ヲ看ルベシ何トナレバ其合意ハ当事者ノ無能力又ハ承諾ノ瑕疵ニ由テ取消サルヽコトヲ得ベク或ハ承諾人ノ不履行ノ為メニ解除セラルヽコトヲ得ベケレバナリ本条ニ掲ケタル立法者ノ決定ハ同時ニ権利ヲ回復シタル善債権者ト

抵当ノ抹消及ビ減少ヲ信シ自己ニ充分ノ利益ヲ供フ可キモノナリト考ヘテ抵当ヲ承諾シ且ツ其登記ヲ為シタル新債権者ノ利益ヲ調和スルコトヲ以テ目的トセリ

今設例ヲ以テ之ヲ明カナラシム可シ例令ハ甲ナル債権者ニ属スル抵当ガ一個ノ不動産ニ付テ抹消セラレ而シテ同一不動産ニ付キテナル債権者ハ并ニ他ノ抵当権ヲ有シタルトキ丙ナル債権者ハ此抹消ノ後ニ至リ新タニ抵当ヲ取得シ且ツ其登記ヲ為シタルニ甲ナル債権者ノ

登記ハ其抹消ヲ取消サレ完全ナル地位ヲ回復シタリトス可シ此場合ニ於テ甲ナル債権者ハ乙ニ對シ優先権ヲ有スルコト從来ニ異ナルコトヲカル可シ何トナレバ乙ハ当初ノ地位ニ比シテ甚ダ不利益ヲ受ケタリト謂フヲ得ザレバナリ然レドモ甲ハ丙ノ為メニ優先セラル可シ何トナレバ丙ハ自カラ登記ヲ為スニ当リ乙ノ登記アルコトヲ知ルト雖トモ甲ノ登記アルコトヲ知ラザリシモノナレバナリ

此ノ如ク数人ノ権利互ニ抵觸スルトキハ之レ

が調和ヲ為スコト甚タ困難ナル如シト雖トモ
其実決シテ難シトスル所ナシ例令バ三個ノ債
権者各々一千円ノ債権ヲ以テ登記ヲ為シタリ
トスル可シ然ルニ抵当ノ目的タル不動産ハ僅カ
ニ二千五百円ヲ以テ競売セラレタリトセバ債
権者ノ一人ハ必ズ五百円ノ損失ヲ蒙ムラザル
可カラズ若シ然ラスシテ不動産ノ競売代価ガ
一切ノ債権者ニ全額ノ弁済ヲ為スニ充分ナル
トキハ本条ノ問題ハ何等ノ利益ヲモ有セサル
ガ故ニ必ズヤ此ノ如キ競売代金ガ債権ノ全額

ニ比シテ小ナルコトヲ假想スルヲ要ス此場合ニ於テ乙ハ債權ノ全部即チ一千円ノ権利ヲ受ク可キコト勿論ナリ何トナレバ第一ニ一千円ノ権利ヲ受クルモノ甲ナルト丙ナルトヲ問ハズ乙ハ何等ノ利害関係ヲ有スルコトナケレバナリ第二ニ配当セラレタル一千円ニ至ツテハ独リ之ヲ甲ノ有ニ帰ス可キニ非ラズ何トナレバ丙ガ抵当ノ登記ヲ為スニ当ツテハ自己ニ對シ優先權ヲ有スルモノハ單ニ乙ノミニシテ甲ナル債權者アラサレバナリ此故ニ丙モ亦一千

円ノ無価ヲ受クベク従ッテ其五百円ハ一旦甲
ニ配当シタル千円ノ内ヨリ扣除セサル可カラ
ス此ニ於テ乎甲ノ受クベキ所ノモノハ唯五百
円アルノミ故ニ右ノ場合ニ於テ結局損失ヲ負
担ス可キモノハ甲ナリトス
然レトモ更ニ設例ヲ変ジ乙トキハ一層有益ナ
ル場合ヲ得ベシ
一旦抹消セラレ而シテ後再ビ復活セラレタル
甲ノ有スル抵当債権ガ二千円ナル場合ヲ想像
ス可シ此場合ニ於テ甲ガ抵当ノ登記ヲ保存シ

更ニ剛断ナカリシトキハ捐失ヲ受ク可キモノハ乙ナル債権者ナリ又丙ガ千円ノ登記ヲ為シタルトキハ乙ノ登記アルニ止マリシヲ以テ丙ガ完全ナル弗流ヲ受ク可キニト又疑ヒナシトス然ルニ其後ニ至リ景況ヲ持流セラレタル甲ノ登記再ビ右効ト為リタルトキハ次ニ掲クル如キ結果ヲ生スベシ即チ此登記ノ甦生ハ丙ヲシテ捐失ヲ蒙ムラシム可キモノニ非ラズ此故ニ丙ハ一千円ノ弗流ヲ受クベシ甲ハ僅カニ第一位ニ於テ一千円ノ弗流ヲ受クルニ止マリ乙ハ

唯五百四ノ番号ヲ受クルニ過キサルベシ何ト
ナレハ此全題ハ乙か当初ヨリ番号ヲ受クルニ
トヲ期シタル所ノモノナレハナリ

第二百三十八条

登記ノ過誤又ハ脱漏ハ未タ以テ登記ノ取消ヲ
為サシムルニ足ラズ然レトモ此ノ如キ誤謬ハ
常ニ正誤ヲ為ス可キモノナルか故ニ此場合ニ
於テハ当事者ノ合意若クハ裁判ヲ以テ之ヲ行
フベシ而シテ此合意及ヒ裁判モ亦訂正ヲ要ス
ル登記ノ欄外ニ之ヲ記入スルモノトス

此場合ニ於テモ亦第三者ニ對シテハ同一ノ担保ヲ與フルモノトス即チ登記其他ノ正誤ハ第三者ニ對シ既往ニ溯リテ効力ヲ及セサルモノナリ

第四節　債權者間ノ抵當ノ效力及ビ順位